國學院大學学術情報リポジトリ

〔研究ノート〕
幼稚園における２歳児保育と子育て支援

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2024-04-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 塩谷, 香, 島田, 由紀子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000292

〔研究ノート〕

幼稚園における２歳児保育と子育て支援

塩谷　香　　島田　由紀子

【要旨】

幼稚園における２歳児保育は、文科省では「幼稚園の人的・物的環境を適切に活用し、個別のかかわりに重点を置いた子育て支援として受け入れる」としている。しかしながら園側では入園者の確保とスムーズな入園を目的としており、保護者の側も子育て支援としての内容を求めているのではなく、家庭ではできない体験として教育的な内容を園に期待していることが調査（Shimada & Shioya, 2022）から考えられた。そこでこの研究では、未就園児保育を受ける子どもの多くが２歳児であることから、子育て支援としての２歳児の保育のあり方を探ることを目的とする。子育て支援施設での幼稚園就園を前提とする２歳児保育を行っている支援者にインタビュー調査を行い、子育て支援の一環として２歳児保育を行う意義について、また子どもや家庭の状況が変化する中で今後の子育て支援の課題や保育の課題を明らかにしたいと考えた。

【キーワード】

未就園児保育　２歳児の発達の特性　親子の孤立化　子育て支援　身近な支援者

１．問題の所在

（１）幼稚園における未就園児保育の現状と課題

文部科学省では、幼稚園における未就園児の保育について「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受け入れに係わる留意点」(2007) を通知し、ここでは２歳児の発達の特性を考慮し、幼稚園教育をそのまま当てはめていくのではなく、個々の対応を重視すること、また子育て支援においては家庭との連携を十分に図ること、家庭の教育力の再生、向上につながる支援を行うことなどが示されている。

また、子ども・子育て新制度の給付制度に移行した幼稚園では、就労や介護のみならず求職中であること、出産の準備期間・産後の休養期間なども要件として２歳児の受け入れを行っている。つまり２歳児の段階で、保護者は幼稚園か保育所を選べる時代になったとも言える。来年度の入園児の確保、３歳児保育へのスムーズな移行を主な目的として行われてきた未就園児の２歳児保育は社会的な要請を受けながら徐々にその姿を変えつつある。

また幼稚園における未就園児の保育の実態については全国幼児教育研究会（2019）が行った全国調査に詳しい。それぞれの幼稚園が置かれた状況に合わせながら、保育内容を工夫している幼

稚園の取り組みの様子が具体的に示され、受け入れる幼稚園側の視点から成果として「３歳児の園生活の円滑なスタート、２歳児の安心した生活」を挙げ、親子登園での子育て支援の効果も大きいとしている。一方で課題としては園の費用負担（人件費や施設改修費など）が大きいことや環境など条件整備が難しいことなども挙げられていた。さらに２歳児保育の質を保障するためには、保育の在り方に関する計画作成の参考となるような資料作成が必要とされている。保育所保育指針が参考になる場合もあり得るが、保育所とは違う特徴を持つ幼稚園という場にふさわしい２歳児保育の在り方の基準が求められていると考えられる。

（２）幼稚園の未就園の２歳児保育と保護者のニーズ

全国幼児教育研究会の実態調査（2019）では、保育者の視点での検討であったが、保護者からの視点で行った研究は数少ない。Shimad & Shioya（2022）は「幼稚園における２歳児保育に関する保護者のニーズ」について、送迎を行っている保護者を対象に調査を行った。その結果、「自宅から近いこと、交通の便がよいこと」、「安全性の問題」以外で、重視されていることは、「他の子どもの遊ぶ体験ができる」「体を十分に動かして遊ぶ」「みんなで一緒に楽しむ活動ができる」「自分のやりたいことをみつけて遊ぶ時間が大切にされている」「子どもに友だちができること」であった。このことから、子ども自身の体験を重視している傾向がうかがえる。一方、重視されていないことは「自身の友だちができること」「家族のことを相談できること」「子ども子育てについて相談できること」「悩みを相談できる場が設定されている」であった。保護者自身に関することが重視されていないことが考えられた。

またこの保護者への調査結果と協応するような研究結果もある。榎田（2015）によると「保育者が２歳児保育において大切にしたいこと」についての質問紙調査の結果から、幼稚園における２歳児保育は子育て支援の一環として位置づけられているが、直接的な保護者への支援への回答が低かったとして、２歳児保育の担当者は保護者との連携をさらに図ることが課題としている。

つまり幼稚園における２歳児保育は、文科省をはじめとして位置づけは子育て支援としながらも、園側では「次年度の入園児の確保や入園後の円滑なスタート」が主な目的ということが実態であることが明らかになった。このことは、保護者のニーズを汲み、２歳児の発達の特性を考慮した教育ではなく、幼稚園教育を早期から行うこととつながってしまう危惧もある。２歳児保育の質を保証するためにも全容を示した資料の作成が急務と考える。

（３）子育て支援に対する保護者のニーズ

保護者を対象に行ったベネッセ（2022）「第６回幼児の生活アンケート」によれば、2015年実施のアンケートと比較して明らかになったこととして、以下を挙げている。

①「母親の育児負担感や不安が増加」していること、子どものために「がまん」が減り、子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」という意識が上昇していること

②「母親の友人・知人」「祖父母」からのサポートが減少していること
③低年齢の未就園児がいる母親は子育ての不安がより強く、頼れる人が限定的である
特に働く母親の育児負担感や不安感の上昇が顕著で、就業形態による差は縮まっている

これらの結果はもちろん、2020年以降のコロナ禍の影響も大きい。また働く母親の増加も関連しているであろうと考えられる。

しかしいずれにせよ、子育て支援の必要性はますます高まっており、コロナ禍以降新しい支援の形が求められているともいえる。こうした状況の中で、幼稚園における未就園の2歳児保育の在り方として保護者と緊密な連携を前提とした子育て支援の在り方を模索していく必要がある、と考えられる。

２．インタビュー調査の概要と結果

今後の子育て支援を見据えた２歳児保育の在り方を探るために、注目したのが「子育て支援施設における２歳児保育」である。数は少ないが、子育て支援を求めて来た親子のニーズに合わせた形で幼稚園就園を前提とした２歳児保育を行っており、幼稚園が抱えるような事情も考慮する必要がない。また保育は、すべて資格保有者で現場の保育者の経験があるものが行っている。もちろん施設設備は十分とは言えないものの、保育を始める以前からこの施設に来ていた親子が参加しているので 、支援者との信頼関係が前提としてある。長年そうした実践を積み重ねてきた支援者から現況を聴くと同時に、子育て支援の一環として２歳児保育を行う意義について、また子どもや家庭の状況が変化する中で今後の子育て支援のあり方や２歳児の保育の在り方を探りたいと考えた。

⑴　調査対象　Ａ市子育て支援拠点ひろばの支援スタッフであるＢ保育者１名（経験15年、保育所での保育経験もあり、有資格）区内では唯一の地域子育て支援における２歳児保育に長く取り組んでいる事業責任者である。
⑵　調査日時　2023年３月１日10：00～12：00
⑶　調査方法　Ｂ保育者を対象に半構造化インタビューを実施した。調査内容は
①子育て支援事業で２歳児の保育をはじめた理由及び経過
②２歳児保育を行う上で大切にしていること
③幼稚園の２歳児保育との相違点
④親子の現状とニーズ
⑤これからの子育て支援の方向
以上５点である。インタビュー中は具体的なエピソードや支援者としての思いも出てくると考えられたことから、必要に応じて柔軟に質問をしながら進めた。また、インタビューはzoomでの

実施とし、録画し逐語録を作成・分析を行った。

⑷　分析方法及び手順　大谷（2007）「４ステップコーディングによる質的データの分析手法SCATの提案」を参考にコーディングからストーリーラインにまとめ、考察を行った。SCATとは、４ステップにより構成概念を抽出するコーディングと、構成概念を繋いでストーリーラインを作成する手続きの質的分析手法である。SCATにおけるコーディング４ステップとは

①テクスト中の注目すべき語句

②テクスト中の語句の言いかえ

③②を説明するようなテクスト外の概念

④前後や全体の分見役を考慮したテーマ・構成概念

である。この手法は、一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの比較的小規模の質的データの分析にも有効である。また、明示的で定式的な手続きを有するため、初学者にも着手しやすい、という特徴がある。

手順は以下の通りである。

①Ｂさんの語りを44のテクストに分ける

②４ステップのコーディングを行い、主に〈４〉のテーマ・構成概念をつなぎ、ストーリーラインにまとめる

③ストーリーラインから理論記述を導き出す

⑸　SCATによる分析例と理論記述

まず１つのテクストごとに４ステップのコーディングを行う。例として、幼稚園就園前の２歳児保育で重視している点について語っているテクスト５を示す。

テクスト５

一つは少子化で子どもが少なくなっているので、人とのかかわり、子ども同士のやりとりっていうのがとにかく希薄なので、幼稚園に入っていきなり子どもに囲まれるとか知らない人と対応するよりも、あのう人とのかかわりを大事にするっていう場が必要、しかも親抜きで。子ども同士だけででかかわる、子どもがスタッフとかかわるってことを先ずは重視しています。

＜１＞テクスト中の注目すべき語句

子ども同士のやりとり、希薄、親抜きで、子ども同士だけででかかわる、子どもがスタッフとかかわる

＜２＞テクスト中の語句の言い換え

保護者のいない場で他の子どもとかかわることや大人とかかわることが大事

＜３＞左を説明するようなテクスト外の概念

就園前であっても人とかかわれる場が必要

＜４＞テーマ・構成概念
（前後や全体の文脈を考慮して）

意図的に経験する人とのかかわり

このように44のテクストすべてのコーディングを行い、主に＜４＞をつなぎ合わせるような形でストーリーラインを作成する。

「就園前は親も子も地域で孤立化しており、親子が交流できる場がない。ひろばは、子どもにとっては子ども同士のかかわりを体験できる場であり、保護者にとっては子どもを遊ばせることができる、話のできる子育ての経験者もしくは身近な専門家がいる、人とかかわりたくないという保護者もいるが他者の経験を聞いて安心感を得る、保護者自身の気づきがあるなど子育て支援のニーズが満たされる場である。しかし、子どもを預けることが一般化し、保育所に入所させた方がよく育つという考えも浸透しており２歳児は多くの子どもがすでに保育所に入所している。ひろばでは０，１歳が中心で２歳児が同じような子どもとかかわる体験がしにくくなっている。幼稚園入園を前に集団保育に慣れてほしいという保護者のニーズがあり、また２歳児の発達の特徴的な姿は保護者ももてあます時期でもあり、育てにくさを感じる時期でもある。さらに意図的に人とのかかわりが必要な時期でもある。しかし２歳児では個別の対応が多く求められ、子どもが安心して過ごせる場であることも重要である。また保護者はわが子レベルに合わせた相談も求めているので子育て支援としてはそのニーズに応える必要もある。そのため身近にいてわが子を知る専門家、２歳児の発達や保育を知る専門家がフォローすることも必要である」

このストーリーラインから理論記述を試みる。

① ２歳児の保育は子ども同士のかかわりなど意図的に経験する必要があり、また個別の対応も可能な安心できる場で行う必要がある

② 保護者には、他児と遊ばせたい、わが子を知る身近な人に相談をしたい、というニーズ

がある

③　親子にとって身近な専門家がいることが重要である

さらに追及すべき点・課題については

＊子どもの最善のための子育て支援

＊特徴的な発達の２歳児の保育に必要な経験や援助の在り方

＊保育所に入所した子どもの育ちの違い

以上３点をあげた。

３．考察

（１）理論記述からの考察

この調査からの理論記述に沿って考察する。

①２歳児の保育は子ども同士のかかわりなど意図的に経験する必要があり、また個別の対応も可能な安心できる場で行う必要がある

幼稚園就園前の保育は、多くは来年度入園予定の２歳児が対象であり、ほとんどが就園予定の園で行われ、保護者は集団に慣れてほしい、他児と遊ばせたい、というニーズの他、幼稚園ならではの教育的な内容を期待している。一方子どもの側も他児とのかかわりや家庭ではできない遊びの体験も求めていることもあるので、幼児教育の前の段階で個別のかかわりを中心とした意図的な保育が必要である。この子どものニーズを十分に理解したうえでの「未就園児保育」が行われなければならない。もちろん安心できる場と人も必須条件である。それは保護者との信頼関係もあり、子どもの発達を理解した保育の専門家が担うことが必要である。

幼稚園での未就園児の保育を行うにあたっては次のことが配慮されるべきと考えられる。

＊幼稚園教育をそのまま当てはめるのではなく、２歳児の発達を理解して個別対応も含めて、必要な体験を組み立てて保育が行える有資格者の配置

幼稚園教諭の専門性だけでは対処できないこともあるので、保育士資格は必須となる。

＊親子での体験と親子分離の時間の体験もどちらも可能であること

時期や内容によって臨機応変に、また子どもに無理のないような活動とすること

②保護者には、他児と遊ばせたい、わが子を知る身近な人に相談をしたい、というニーズがある

少子化、地域の人間関係の希薄化など親子が地域で孤立化している傾向はコロナ禍を過ぎてもその状況は変わらない。遊び友達が欲しい、という親子のニーズに応えるべくひろばが存在しているが、２歳児にとっては今やそれは難しい。同じ２歳児の多くはすでに保育所に通園しているからである。そうなると幼稚園の２歳児保育が必要となる理由にもなる。また家庭ではこの年齢ならではの育てにくさに保護者は直面し、「もてあます」状況にもなっていることから、子育ての悩みや心配に応えられるような子育て支援が必要になる時期でもある。就園前の２歳児の保育

には親子それぞれのニーズがあり、保護者には身近な人に相談したいという思いもある。つまり親子のニーズが満たされるような場であることが必要といえる。

しかしながら現状は親子のニーズに応えられるような保育や支援が難しい。幼稚園では、前述のとおり入園者の確保や入園後のスムーズな移行を目的としており、また保護者も園には子育て支援を期待していない（Shimad & Shioya, 2022）。現状は保護者が目的に応じて使い分けをしている。それだけ様々な施設が保育や子育て支援を展開しているともいえるが、一つの施設で親子のすべてのニーズを満たすことは難しいのが現状となっている。ただ２歳児を受け入れるにあたって文科省（2007）が指摘している通り「保護者の育児不安、負担の解消等の保護者のニーズに応えることになる」であるとすれば幼稚園教諭の意識と新たな専門性が必要であることは間違いない。幼稚園教育の中で行われる保護者への支援とは明らかに質の違う支援が必要になる。幼稚園でそのニーズを満たすこととするのであれば幼稚園教諭に対する研修等の新たな取り組みも必要となるだろう。

③　親子にとって身近な専門家がいることが重要である

就園前の２歳児の保育についても、保護者への子育て支援についても今回このインタビュー調査において「２歳児の発達の特性を理解した保育を行える」「適切な保護者支援ができる」、さらに「自分の子どもレベルで相談できる」身近な専門家の存在が必要であることが示された。遠い専門家ではなくあくまで身近な存在、親子をよく知る身近な存在であるからこそ、気軽に相談でき、悩みや不安を解消し安心して子育てに向かえる状況になる。２歳児の発達の特性は、言葉で伝えることがまだ難しい状況であることもあり、保護者には理解が難しく、子どもの思いを読み取ることは困難である。そこで専門家の解釈をわかりやすく伝えてもらえることで、初めて気づくこともある。保護者が子どもの思いを理解して、かわいいと感じながら子育てできることが何より子どもにとって良いことになる。B保育者の語る「豊かな２歳児の時期」となるのではないだろうか。

（２）今後の幼稚園における２歳児の保育

今後の幼稚園における２歳児の保育は、２歳児の発達の特性を理解し、またそこから生じる保護者の不安や悩みの解消といった子育て支援をも含めて行われるべきものである。

幼稚園教育要領解説（2018）によれば、「幼稚園は家庭ではできない社会・文化・自然などに触れ、教師に支えられながら、幼児期なりの世界の豊かさに出会う場である。幼稚園にはこのような家庭や地域とは異なる独自の働きがあり、ここに教育内容を豊かにするにあたっての視点がある」とされている。これはまさに幼稚園の特性であり、２歳児の保育にあたっても必要なことといえる。しかしながら、これは家庭や地域がしっかりと機能していることが前提である。本研究でも示した通り親子が地域で孤立化している現状では、このニーズを担う場所が必要であり、

今後は幼稚園でその役割を果たしていく必要もあるのではないかと考える。それは保育所の保育とは異なる、子どもにとって有効な教育環境と保育内容を備えた幼児教育の場であり、より強固に家庭や地域と連携した支援が行われる場であることが必要である。

今後は、幼稚園において２歳児の保育が親子のニーズを満たすものとして機能することが望ましいが、現実は難しい。子どもにとっても保護者にとっても有意義な活動を展開していくために必要なことは、幼稚園教諭が２歳児の保育のための新たな専門性を獲得していくことと同時に地域の施設とより緊密な連携を図り、親子に関する情報を共有することが有効ではないかと考える。縦割り行政の弊害や私立幼稚園の教育方針もあり、地域との連携が難しい状況もあるが、地域に目を向け、親子のニーズに向き合い、地域の施設の支援の状況についても理解していく必要がある。

「２歳児特有の発達を踏まえた受け入れに配慮し、その成果を３歳児以降の幼稚園教育に円滑につなげていくことが大切である」（文科省, 2007）と示されているが、その成果とは、保護者との連携についても同様である。幼稚園がこれからの幼稚園教育を進めるにあたっても子育て支援は今後ますます重要になってくる。保育所の実践も取り入れながら、親子にとって必要な、幼稚園ならではの支援が実現できることを期待したい。

４．今後の課題

（１）親子の今を探るために

本研究のインタビュー調査から、リアルな親子の置かれた状況が見えてきた。地域での親子の孤立化は今後少子化が進行するにあたってさらに厳しいものになることが予想される。３歳児神話はすでに過去のものとなり、保育所で多くの子どもが幼少期から長時間の保育を受けている現状がある。「保育所に入所した子どもの方が良く育つのか？」この点は今後探求していくべき課題である。

こうした親子の今を探るためには当事者の語りに真摯に耳を傾けることが最も有効な方法であると考える。インタビュー調査にあたっても様々な方法で信頼関係をつくりながら、本音を語ってもらえる状況づくりも重要である。子育ては社会の変化に伴い、解決すべき課題が山積している。子どもを取り巻く保護者、保育者、支援者が子どもの状況をどのようにとらえているのか、どのようなことで迷い、不安を感じるのか、何を必要としているのか、語りを深くとらえることで明らかにしていきたい。

（２）２歳児の保育についての今後の研究課題

今回の研究において、B保育者の語りを通じて、現在の保育や子育て支援が子どもの最善となっているのか、子どものニーズと保護者のニーズのすり合わせが大変困難になることがある、と考えられた。保護者のニーズは必ずしも子どものためとは言えないこともあり、さらに相反するこ

ともある。幼稚園が入園者の確保のために保護者のニーズを優先させるとするならば、子どもにとって望ましい経験にならないとも限らない。ここにも保育者が子どもの最善のための子育て支援を行う専門性が重要になってくる。身近な専門家は保護者に何をどのようにアプローチしていくのか、具体的な策を明らかにしていく必要がある。

また今回は２歳児の発達にふさわしい保育内容を明らかにすることまではできなかった。２歳児にとって必要な経験とその援助を明らかにし、実践するとともにそれを保護者にも理解を得られるよう努める必要がある。そのためには子育て支援の視点も織り交ぜながら保護者に伝えていくことが重要なのではないかと考えられた。

文献

ベネッセ教育総合研究所（2022）「第６回幼児の生活アンケート」報告書

榎田二三子（2015）幼稚園教諭の専門性に関する研究動向―２歳児保育における専門性―，武蔵野大学教職研究センター紀要，3，19-25.

榎田二三子（2017）２歳児保育における幼稚園教諭の保育観に関する一考察，武蔵野教育學論集，1，1-9.

大谷尚（2007）４ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，54（2），27-44.

大谷尚（2011）明示的手続きで着手しやすい小規模データに適用可能な質的データ分析手法，感性工学，10（3），155-160.

文部科学省（2007）幼稚園を活用した子育て支援としての２歳児の受け入れにかかわる留意点，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/049/shiryo/attach/1366917.htm（最終閲覧日：令和５年９月30日）

名古屋大学高等教育研究センター（2023）名古屋大学生のためのアカデミック・スキルズ・ガイド

Shimada.Y & Shioya.K（2022）Japanese parents'needs regarding childcare supportpport provided ndergartens for 2 year old children，The 14th Asian Society of Child Care，14-17.

幼稚園教育要領解説（2018）文部科学省

全国幼児教育研究協会（2019）幼稚園教育への円滑な接続の観点から行う子育て支援としての２歳児の受け入れに関する調査研究

（しおや　かおり　人間開発学部子ども支援学科）

（しまだ　ゆきこ　人間開発学部子ども支援学科）